

## ディケンズを読む

増 田 秀 男

### I. A (trim) blue coat

『ドンビー父子商会』の最初の章で、息子の誕生を喜ぶドンビー氏の服装は次のように描かれている。

Dombey, exulting in the long-looked-for event, jingled and jingled the heavy gold watch-chain that depended from below his trim blue coat, whereof the buttons sparkled phosphorescently in the feeble rays of the distant fire. (*Dombey and Son*, Ch. 1, p.1.)

ドンビーは、長いこと待望していた出来事に大喜びで、りっぱな青いコートの下から垂れ下がっている懐中時計の重い金の鎖をしきりにちりちり鳴らしていた。コートのボタンは遠くの暖炉の火の弱々しい光に照らされて青く光っていた。

まず目に付くのは、ディケンズがここで「りっぱな青いコート」と「懐中時計の重い金の鎖」と「青く光るボタン」だけで City-merchant であるドンビー氏を描いていることである。ディケンズの作品では女性がしばしばボネットやショールだけで表されるが、それと同じように、ドンビー氏はここで、コート、時計、それについている鎖、それにボタンだけで表されている。ネクタイ (cravat ないし neckcloth) も、時計がそのポケットにいれられ、鎖がつけられているはずのチョッキ (waistcoat) も、ズボン (trousers ないし the inexpressibles) も省略されている。

こういうディケンズ一流の〈省略法〉は確かにディケンズの小説に特有のテンポをもたらすものであり、これだけで City-merchant としてのドンビー

氏が身につけているものの描写としては、充分であると言えるであろう。ただし、殊に現代の読者にとっては、from below によって暗示されているチョッキを〈復元〉すること、すなわち鎖が垂れ下がっているのはチョッキからであることを理解するのは難しいかもしれないが。

しかしともかく『ドンビー父子商会』とほぼ同時代の〈紳士〉の服装に関する記述によってドンビー氏の服装を全面的に復元してみよう。

In 1844 we read in *Punch* that the correct morning dress for a gentleman was a “blue frock-coat, white drill trousers, and a white stock”; in the evening, long-tailed coloured coats, light trousers, white waistcoats and cravats were worn. In any masculine assembly, a variety of greens, blues, buffs, browns and greys were to be seen, with here and there the gleam of gilt buttons and the glossy sheen of satin cravats. (Quennell, p. 87.)

これで「青いコート」、「光るボタン」、とともにドンビー氏の服装は夜用の装いも含めて復元された訳であるが、上の引用に続くクェネルの記述はコートの青い色がやがて消えていくものであることをも教えてくれる。

The old love of colour which had made men's clothes in previous centuries so brilliant was not yet extinct, and the general effect of masculine attire before 1850 was cheerful, graceful and pleasing.

By 1855, however, we see a great change. Fashions had become darker, more uniform, and far less interesting. Sober business men felt that gay hues were not suitable in a hardworking, utilitarian age, and they preferred clothes that were richly plain than colourful. Black frock-coats of a simpler cut replaced the blues and greens of the previous decade. (Quennell, pp. 88-89.)

クェネルがここで言っていること、すなわち、〈紳士〉のコートの色が黒になっていったこと、またその変化が、「派手な色は勤労と実利を重んずるこの時代にふさわしくない」という考え方から来たものであること、さらに言

えばメンタリティの変化が＜紳士＞のコートの色を黒に変えたということ、は大方の歴史家の見解と一致している。またこうした変化が起こった時期についてのクェネルの判断にも誤りはないようである。

そして次の服飾史家の記述は、まず黒以外の色が「黒っぽく」なる段階があって、その後に黒が完全に唯一の色になっていったことを窺わせる。したがって、ドンビー氏のコートの青い色は「派手な」、明るい青ではなくて、「黒っぽい」ものであったと推測してよいであろう。

In 1840s coats in dark shades of brown, green, and blue were still to be seen even in the evening, but by 1853 nineteen out of twenty dress coats were black. (Gernsheim, p. 33.)

さらに上の記述のなかの「夜分でも」という表現からは、evening dress からまず黒っぽい色への、また黒への変化がはじまり、それが morning dress にまで及んだことが分かる。まずフォーマルな服装から、すなわち respectability がより重んじられる場合の服装から、変化がはじまった訳である。そして同時に「夜分でも」という表現は、上記の変化が＜渋々＞起こったものであることも示している。respectability が重んじられる場でも黒への抵抗はあったのである。

さて、次に引く1850年頃のイギリスに関する歴史家の記述でも、コートの色の変化が起こったことが述べられている。

The 'typical townsmen', whatever his class, generally wore dark clothes because they were the only ones which would not look grimy and unkempt after a few hours' wear, and a hat was valuable protection from the steady downpour of grit, smoke and soot. (Roebuck, p. 4.)

ここでは＜紳士＞に限らず都会で生活し、活動する人達の間で広く「黒っぽい服」が着られるようになったと言われている。1850年頃のイギリスで着られていたコートは、前に引用した二人の意見によれば、この時点ではまだ黒への変化を完了していなかったはずであるから、ここは二人の意見と一致し

ている。ただ「服」という表現は、普通チョッキやズボンも含むものであるから、クェネルの、つまり *Punch* の意見とは異なっている。また、別の服飾の専門家も、グレイと黒の縞のズボンが一般的になって、ズボンが黒っぽくなるのは、1860年代である (Nunn, p. 142.) と言っている。したがって、ここはロウバックのペンの走り過ぎと見るべきであろう。そしてこの点を除けば私はロウバックの説に賛成である。すなわち、黒っぽいコートが都会の人達の間で着られはじめたのは、煤と砂埃を避けるためであり、帽子がイギリス人にとって手離せないものになったのも、煤と砂埃を避けるためだったという説に賛成である。コートの色の黒っぽい色への、さらに黒への変化が、ヴィクトリア朝人の〈意に反して〉起こったものであったことを考えると、変化の原因はメンタリティの変化にあったと考えるよりは、いわば環境の変化に適應するためだったと考えるのが妥当だと思われるからである。なぜならば、この時期でも、大都市の外ではまだ派手な色のコートが着られていたからである。

Light-coloured or checked suits with a short-skirted coat could be worn outside London.....The dark frock coat, with skirt descending vertically to the knees, was the garment worn on most day-time occasions. (Gernsheim, p. 33.)

まず上の「ロンドンの外では」は、ロウバック説をとるとすれば、すべてのかなりの大きさの都市の外ではと読み変えることができよう。しかしここで取り上げたいのは、田舎では明るい色の、しかも裾の短いコートが通用しているのに、都会では黒っぽい、しかも膝まで覆う裾の長いコートが一般的になっていたという指摘である。ガーンズハイムにはそういう意識は無いらしいけれども、これもロウバック説から見れば、都会では煤がついても目立たないように、黒っぽい、しかも膝まである丈のコートが、一般的だったということになる。

さらに、ズボンの色のほうは白<sup>(1)</sup>または明るい色が一般的であったという事実は、コートの変化が内的な理由によるものではなく、環境の変化への適應であったという事実の裏付けとなるであろう。なぜならヴィクトリア時代の道路として最も一般的であったマカダム・ロードも、当時列車以外の

唯一の乗物であった馬車も、次に記述されているようなものだったからである。

But the good macadam road was a very different thing from those we have now.....The surface was worn off by the iron tyres of the wheels—because rubber was not used as now—and laid on the top of the road in a good solid layer of dust. (Quennell, p. 200.)

ヴィクトリア時代の馬車は埃を作りだし、埃を巻き上げながら走るものであった。その上馬車の台数は年とともに増えるばかりだったのである。

By the 1840s, there were 2,500 hackney cabs in London, a thousand more than ten years previously, while the number of buses had increased from 620 in 1839 to 1,300 in 1850. (Weightman, p. 110.)

In 1856 the number of people owning their own private carriages was slightly over 200,000. (Harrison, p. 110.)

The number of private carriages in England and Wales increased from some 205,000 in 1851 to 460,000 in 1881. (Read, p. 63.)

そして勿論上記の馬車の他に荷物運送のためのいろいろな馬車があった。この種の馬車は、人口爆発、消費社会の到来と、鉄道が加速化した物資の流れの速さを受けて増加の一途をたどっていたのである。こうして1850年のロンドンでは、朝9時から夜9時までの12時間の間、当時一番馬車の通行量の多かったロンドン・ブリッジでは、毎時平均1,091台の馬車が、また12時間では13,090台の馬車が通行することになる (Mayhew, vol. II, p. 282.)。次の服飾史家の記述も、これほどの数の馬車が浴びせる埃や砂塵にヴィクトリア朝人が鈍感でなかったことを窺わせる。

About 1839 'summer buckskin' and the various 'greys' were found more suitable for summer trousers than the usual white or yellow cloths. (Köhler, p. 410.)

埃が目立ちやすい白や黄色が、特に埃の立ちやすい夏に避けられているのである。材質の面でも鹿皮のズボンなら埃は付いても簡単に払える訳である。なおズボンの色は、前に見たように、60年代から黒とグレイの縞に変わっていき、そしてその後はズボンもさらに黒くなっていく。道路の作りの工夫が進む一方で、煙害がますます酷くなったからであろう。

さらにある意味ではこれほど馬車が増えたのも、respectable な人々が respectable な外見を保とうとしたからだと見ることもできるかもしれない。コートの黒が煤に対する〈保護色〉、ズボンの明るい色が埃に対する〈保護色〉であったように、馬車は煤と埃に対する〈シェルター〉であったとも考えられるからである。煤と埃に上記の馬車をひく馬、さらに、乗馬がもたらしたであろう〈糞害〉——一頭の馬の馬糞〈生産量〉は年間3～4トンである(Read, p. 63.) という——をあわせて考えれば、respectability を何よりも尊重したヴィクトリア朝の上・中流階級の人間が、馬車を必需品と考えるようになったのも無理はないと思われるがどうであろうか。

『ドンビー父子商会』が書かれたころのイギリス人は、ズボンについては埃がついても目立たないように明るい色のものを、コートは煤がかかっても目立たないように黒っぽいものを、着ていた。そしてその後黒いコートと黒っぽい、また黒いズボンを身につけるようになった。ディケンズの小説の中でも、青いコートは『ドンビー父子商会』の後しばらくすると消えてゆくものなのである。

## II. Smoke nuisance, vice and fever

では黒いコートへの変化をいわば必然的なものにした煤はどこから来たのか。工場の煤煙、それに家庭の料理、暖房用の火である。次に引くのはディケンズの工業都市ヨークタウン(プレストン)の描写である。

It was a town of redbrick, or of brick that would have been red if the smoke and ashes had allowed it; but as matters stood it was a town of unnatural red and black like the painted face of a savage. (Hard Times, Ch. 5, p. 19.)

それは赤煉瓦の町だった。もっともそれは煤煙と灰が赤くしておいてく

れたらのはなしであって、そんなことのあるはずもなかったから、町はまるで絵の具を塗った蛮人の顔さながら、この世のものならぬ赤黒のだんだらであった。

赤煉瓦まで黒くしてしまうのだから、コートは黒にならざるをえないであろう。ディケンズはここで工場の煤煙による煙害を風刺し、批判している。工場の町の煙突と煙はかつてのようにもっぱら繁栄と進歩を象徴するものとはみられなくなっているのである。しかし煙害の責任者はこんな批判にめげたりはしない。次に引くのはヨークタウンの工場経営者バウンダービー氏の工場排煙擁護論である。

“.....First of all, you see our smoke. That's meat and drink to us. It's the healthiest thing in the world in all respects, and particularly for the lungs. (*Hard Times*, II, Ch. 2, p.112.)

「一略一先ず第一に、あなたもご覧の煙です。あれは我々にとっては食べ物や飲み物のように欠くべからざるものです。煙はあらゆる点でこの世でもっとも健康的なものです。ことに肺にはですね。」

当の責任者がこうなのであるから、工場排煙の量は減るわけがない。『敵しいご時世』が書かれたのは1854年であるが、この前年にすでにロンドンでは工場排煙に対する規制がはじまっていた。ただしこの規制はまだヨークタウン、すなわちプレストンには及んでいなかった。規制がはじまっていたロンドンに住んでいたディケンズとヨークタウンの住人であるバウンダービー氏の煙害に対する意識の上での〈時差〉がここにはある。

The black wreath over London was thinning; the Thames was fringed with smokeless chimneys. The Home Office had begun to harry offenders under the Smoke Nuisance (Metropolis) Act of 1853. (Young, p.51.)

ただし進んだ意識によってはじめられた、ロンドンにおける工場排煙に対する規制もそう効力がなかったことは、ヤングの「ロンドンを覆っていた黒煙

も薄くなってきていた」という表現にも表れている。そして先ず第一にこの種の規制の徹底を遅らせたのは、やはり工場の煙突と煙を繁栄の象徴と捉えるメンタリティーであり、煙ほど肺に良いものはないと強弁するパウンダービー氏型の〈経済的個人主義〉の論理であった。次に引くのは1887年のミドルズバラ市長の市庁舎落成時の演説である。この時点でもまだこの種の論理が罷り通っていたのである。

The smoke is an indication of plenty of work—an indication of prosperous times—an indication that all classes of workpeople are being employed, that there is little necessity for charity and that even those in the humblest station are in a position free from want. Therefore we are proud of smoke. (Briggs, p. 263.)

この市長は町で一番大きな造船所の経営者でもあった。そしてこの引用では省略したが、演説の間に何回も拍手が起こり、歓声があがっている。技術的な困難もあったにせよ、煤煙は〈必要悪〉として受け入れられていたのである。つまり、煙害に対する意識の上の〈時差〉は『厳しいご時世』が書かれてから30年以上の時が経ってもまだなくなっていないのである。

しかし「黒煙も薄くなってきた」状態に止まっていたのは、実は家庭排煙のためだった。何しろ家庭排煙は、次に引く記述を信じるとすれば、全体の95パーセントにのぼる率を占めていた。それにもかかわらず、規制の対象にはなっていなかったのである。工場排煙を規制する動きが1840年代からはじまっていたにもかかわらず、世紀末になっても〈必要悪〉として受け入れられていたように、家庭排煙も必要悪として受け入れられていたのである。石炭や薪よりはクリーンなエネルギーであるガスはすでに40年代の終わりごろに使用可能なエネルギーとなっており、ガス・クッカーなども売り出されていた。それにもかかわらず、'80年代、90年代になるまではガスは産業用としては勿論、家庭用としても広く用いられていなかった (Best, p. 42.)。理由は石炭、薪にくらべて高いということであったが、産業排煙が猛々しく見えたのに対して家庭排煙がおとなしく見えたために、統計好きなヴィクトリア朝人にも家庭排煙はそれほど高い比率を占めるものとは思われなかったのであろう。



Domestic smoke, estimated to constitute up to 95 percent of the whole, was excluded from the ordinances. (Mitchell, p. 269.)

次に引く詩はその家庭排煙についても風刺している。

The smoke nuisance was bad both in Leeds and Bradford.....Bradford men either liked their own smoke or made fun of it.....A local satirist took up the theme :

How beautiful is the smoke  
 The Bradford smoke :  
 Pouring from numberless chimney-stacks,  
 Condensing and falling in showers of 'blacks',  
 All around  
 Upon the ground,  
 In lane, and yard, and street ;  
 Or adding a grace  
 To the thankless face  
 Of yourself or the man you meet :  
 Now in the eye and now on the nose,  
 How beautiful is the smoke ? (Briggs, p. 147.)

上の引用の詩の引用の導入部におけるブリッグズの言葉は明らかに産業排煙に関する風刺詩を導入するためのものである。これに先立つ、1801年にはブラッドフォードには工場は一つしかなかったが、1841年には67になった (Briggs, p. 140.) という記述もそれを裏付けている。しかし、ブラッドフォードが工業化のみならず人口爆発と都市化の影響をもっとも強く受けた町でもあったことを考えれば、ブリッグズが引用している詩は、単に工場排煙のみを風刺したものとは考えにくくなってくる。

Bradford, the fastest growing town in this period of the Industrial Revolution, had 13,000 inhabitants in 1801, 26,000 in 1821, and

104,000 by 1851. (Harrison, p. 27.)

上の文でハリソンが挙げている数字は、50年間でちょうど8倍の人口増となる。しかも、1811年から1851年の間では、どの10年間も50パーセントの人口増を下回ったことはない (Briggs, p. 140.) というのである。かなり長くこの町に住んでいた人にとっては、50年間で8倍という人口増は——これはつまりごく単純に考えれば8倍の<煙突増>でもある訳であるが——一つしかなかった工場が40年の後に67になったということと同じ位、印象的な出来事だったはずであるし、chimney-stacks という言葉は、blacks という言葉に韻を合わせるために使われているものであるにせよ、少なくとも一般の住宅の煙突をも含む表現と理解できるからである。いずれにせよ上の詩からは、降り注ぐ煤は「ブラックス」と呼ばれていて、地面から人の顔や鼻まで汚したということが分かる。コートやシャツには触れられていないが、当然それらも汚れたであろう。それらについては次の連で言及されていることも考えられるが、ブリッグズが出典を示していないので、調べようがない。

しかし——当時のガスは臭いもひどく、煤もかなりでたようであるが——それでも石炭や薪よりははるかにクリーンなエネルギーであったガスへの移行を妨げたものは、経済的個人主義の横行もさることながら、イギリス全体の人口が1801年から1851年の間に倍になるという状況下で各地方自治体がかかっていた生活環境改善問題であった。

The picture of town life presented in the First Report of the Health of Towns Commission, 1844, is thus one of drains being few and inadequate, with open ditches and stagnant pools abounding, refuse left to rot in the streets, and water available to the poorer classes to only a limited extent.....The lack of water must have been heartbreaking for the conscientious housewife who had her floors sullied by filth brought in on boots from the street, and her clean washing spoilt by smuts from local chimneys. (Hopkins, pp. 21-22.)

つまりどの自治体も、上下水道の整備、ごみ処理、尿尿処理の問題に追われていたのである。上の引用文の後段がいみじくも示しているように、洗濯物

が煤で汚れることよりも、水がないことのほうが——当然と言えば当然なのだが——緊急の問題だったのである。ホプキンスは20世紀の歴史家であるが、彼も青いコートが黒いコートに変わっていった原因、そしてひょっとしたら馬車があればほど増えた原因となった、人間が着ている服につく煤には言及していない。

先に引いた風刺詩人が住んでいた町ブラッドフォードでもリヴァプール、マンチェスターなどとならんで、いや、1844年ごろのイギリスのどの都市とも同じように、煙害問題は緊急に解決すべき問題ではなかった。逆に言えば〈必要悪〉として放置しておいていい問題だった。ホプキンスが上の引用で言及しているレポートに載せられたブラッドフォード市当局の都市衛生委員会からのアンケートに対する回答は次のようなものだったのである。

問	い	答	え
排水対策とごみ処理		No regulations, accumulations of refuse thrown	from houses.
下水溝		No arrangements for under-drainage.	
給水		Inadequate supply ; works in progress.	
貧しい階級の給水		From carts, 3 gals for 1 d. (Hopkins, pp.20-21.)	

排水に対して何らの対策も講じられていないためにいたるところに水たまりがあり、ごみは通りであろうとお構いなしに捨てられたまま、下水溝は暗渠にはなっておらず、水は金持ちには水道があるが、貧しい人達は水売りから買わなければならない。さらにいたるところに cesspools と dung heaps がある (Hopking, p. 22.)。こういう状況ではとても煙害の解決が急務であるという考え方は生まれてこないであろう。煙害はせいぜい respectability に対する、あるいは cleanliness に対する脅威でしかなかった。だから、ヴィクトリア朝人はまず<公衆の>、つまり都市全体の——すなわち貧しい人達の居住区も含めた——生活環境の整備が必要であると考え、上下水道、ごみ処理、尿尿処理といった基本的な問題に取り組んだのである。なぜなら、公衆衛生に関する立法は、Public Health Act (1848), Local Government Act and Public Health Act (1858), Sanitary Act (1866) というように、相次いでおこなわれているのであり、各都市もそれを受けてかなり積極的に衛生環

境の改善に取り組んでいるからである。例えば1848年の立法を受けて、1854年には182の local boards of health が活動しており、うち13の自治体ではすでに上下水道を完成している (Evans, p. 297.)<sup>(2)</sup>。次の文章には地方自治体のなかでの推進派と反対派のせめぎあいに関する記述も含まれているのでリーズの例を挙げてみよう。

In Leeds a battle between largely liberal 'improvers' and mainly Tory 'economists' held back early improvement schemes until the mid-1840s. But once the improvers were firmly in control, rapid headway was made, culminating in a Sewerage Act in 1848 and the transfer of waterworks to full public ownership in 1852. (Evans, p. 297.)

リーズは1858年に12万2千ポンドもかけて市庁舎を建てた都市であり (Evans, p. 294.)、経済的には恵まれた都市であったが、この記述からするとリーズでは40年代のはじめから衛生環境問題に関する関心が高まっていたことになる。それに、「経済派」の抵抗にもかかわらず上記のような事業を完成している。ちなみに上記のうち水道事業の買収問題は市議会で賛成22票、反対16票で可決された (Briggs, p. 160.)。自由放任主義が基本的な思想であった時代に、しかも中央政府の力も、地方の役所の力もまだ弱く、ratepayersの発言力が強かった時代に、このように都市全体の基本的環境整備が急務と考えられたということは、ある意味では驚嘆に値する出来事であると私には思われる。そしてこの驚嘆すべき出来事の謎を解く鍵は、civic pride (Briggs, p. 139.) とか、長い目で見れば結局得になる (Briggs, p. 21.) とか、博愛精神とか、有り余る経済力とかにではなく、次の『ドンビー父子商会』の一節に含まれている〈迷信〉に求めることができるのではないかと思うのである。

Those who study the physical sciences, and bring them to bear upon the health of Man, tell us that if the noxious particles that rise from vitiated air were palpable to the sight, we should see them lowering in a dense black cloud above such haunts, and rolling slowly

on to corrupt the better portions of a town..... (Oh) for only one night's view of the pale phantoms rising from the scenes of our too long neglect; and from the thick and sullen air where Vice and Fever propagate together, raining the tremendous social retributions which are ever pouring down, and ever coming thicker! (*Dombey and Son*, Ch. 47, pp. 647-648.)

自然科学の研究に携わり、科学の力で人間を健康にしようと鋭意努力している人々は言う、悪気から生じる有害な微粒子が人間の目に見えるようにできたならば、それらが濃い黒雲となって貧しい人達の居住区の上空に垂れ込め、ゆっくりと動いていって豊かな人達の居住区を侵す様を見ることができであろうと。一中略—たった一夜でよい、私達があまりにも長い間なおざりにしてきたこの場所から、また悪徳と熱病が増殖しあううっとうしい、よどんだ空気から——止むことなく、しかもたえず雨足を強めつつ、恐るべき社会的懲罰の雨を降らせる空気から——たちのぼくくる青白い物の怪が目に見えるようにしてもらいたいものである。

ここで言われている「有害な微粒子」、「青白い物の怪」が指し示しているのは<悪気>または瘴気であり、また先に<迷信>と呼んだものは病原に関する miasma theory である。この説は、ディケンズばかりでなく、ナイティンゲールも、公衆衛生改革の指導者チャドウィックも信じていた (Seaman, p. 49.) 説であり、1890年頃までは、ごく一部の人を除くほとんどの人が信じていた説であると言われている。ではどの程度に信じられていたのか。

悪気説がディケンズをはじめとするヴィクトリア朝人に信じられていたこと、つまり細菌感染説が信じられていなかったこと、は次の文章に述べられている事実によって明らかである。

(In 1849) The Chelsea Water Company still had its intake a few feet from the outfall of the Panelagh sewer, formerly the West Bourne. 'We are paying the companies collectively' wrote *The Spectator*, '£ 340, 000 per annum for a more or less concentrated solution of native guano.' (Wright, p. 151.)

きれいな水を供給しようという運動は30年代からはじまっていた。ところが1849年になってもまだ下水の排出口からほんの数フィートのところで上水道の取水がおこなわれていたのである。この〈無神経さ〉、また雑誌のとりあげ方に感じられる〈余裕〉は悪気説が信じられていたことを如実に示している。ではその悪気説とはどのようなものであったのか。

It (the miasma theory) was based on the belief that noxious odors caused disease in persons who were susceptible because of moral or physical weakness. (Mitchell, p. 492.)

つまり「悪い臭い」または〈気〉というものがあって、それに道徳的、肉体的に弱い人間が触れると病気にかかるというのが悪気説である。また miasmas とは gases and noxious odors (Mitchell, p. 649.) であって、臭いはするが「目に見え」ないものである。

ところで道徳的、肉体的に弱い人間とは、ヴィクトリア朝の中流階級以上の人達にとっては下層階級の人達であった。なぜなら、

Victorian working-class men and women were easily distinguishable from the classes above them by their physical appearance and by their clothes. (Read, p. 37.)

だったからである。つまり着ているものからは勿論——だからドンビー氏のコートは trim である必要がある訳であるが——体格からも労働者は見分けがついたというのである。リードはさらに「口を開かないかぎり」見ただけではどの階級の人間か分からないようになるのは1910年頃になってからだと言っている (Read, p. 38.)。しかも労働者階級の最下層には indolence or the pursuit of easy excitement (Emsley, p. 55.) という two principal vices を持った、lack of moral training (Emsley, p. 57.) を特徴とする dangerous and/or criminal classes (Emsley, p. 68.) があった。労働者階級の人間は「肉体的に弱く」、さらにその最下層の人間は「道徳的にも」弱い人間だった。そして主としてこの階級から、the Great Social Evil (Emsley, p. 67.) と呼ばれた売春をする女性達が出、主としてこの階級のなかで、またさらに

労働者階級のなかで、ヴィクトリア時代の病死の原因の三分の一を占めていたと言われる the Captain of the Men of Death, the White Plague, すなわち結核 (Emsley, p. 59.) が猛威をふるったのである。ディケンズの「悪徳と熱病が増殖しあい」という表現にはこういう背景がある訳である。

したがって、中流階級以上の人達はこの<気>を吸っても安全なはずである。しかしディケンズはそうは考えていない。彼はそれが貧しい人達の居住区から豊かな人達の居住区に流れてきて害をなすと考えている。そうすることで豊かな人達に「社会的懲罰」を下すのだと考えている。悪気の生じるような状態に貧しい人達を放っておくと自分たちも無事ではいられなくなるぞ、ディケンズはそう言っているのである。ここにあるのは運命共同体的な考え方であり、それは時代を支配していた人達の経済的個人主義とはそりが合わないものである。金持ちの住んでいる地区だけ整備すれば良い。当然そう考えたはずの、中流階級以上の人達に都市全体を整備させたもの、Public Healthこそが問題なのだと思えさせたもの——もっと<積極的な>方法として空気を清めるために大砲を撃ったり、タールの入った樽を燃すといったやり方も試みられた (Seaman, pp. 48-49.) ようであるが——それは目には見えないが、いつ「懲罰」を下すかも知れない<気>であった。そして煙はいわば目に見えない<気>の流れを「目に見えるように」している染料のようなもので、潜在的な危険を顕在化するものであった。ヴィクトリア朝人にとってはまず目に見えない<気>のものを絶つことのほうが大事で、煙害は当分の間放置しておいてよい問題だったのである。こうしてコートの色は黒に変わったのである。

しかし煙と同じように目に見えない悪気を目に見えるものとしたものが煙の他にもある。それは統計である。特に死に関する統計である。すなわち、ディケンズの「悪徳と熱病が増殖しあい」という表現における「熱病」による死である。

Average age at death (1842)

Towns	Gentry and Professional persons	Tradesmen	Labourers etc.	General average
Kendal	45	39	34	36
Bath	55	37	25	31

London (4 poor law unions)	44	28	22	25
Leeds	44	27	19	21
Bolton	34	23	18	19
Manchester	38	20	17	18
Liverpool	35	22	15	17

(Hopkins, p. 24.)

ディケンズもこの種の統計は目にしていたであろう。ヴィクトリア時代は<統計の時代>だったからである。この表を見れば悪気との接触の度合いによる差は一目瞭然である。まず明らかになるのは、つまり「目に見えるように」なるのは、「貧しい人達の居住区」の住人と「豊かな人達の居住区」の住人との差である。悪気に触れている——というよりも悪気のなかで暮らしている——人とそうでない人との差である。つぎに明らかになるのは、悪気に触れる機会の多い人と少ない人との差である。商人はジェントリーなどより悪気に触れる機会が多く——貧しい人の居住区に住み、貧しい人達を相手に商売をしている商人ももちろん数多くいた——したがって早死にするのである。最後に明らかになるのは都市と都市の間の差である。悪気の大きな発生源をかかえている都市の住人ほど早死にするのである。立ちのぼった悪気は「豊かな人達の居住区」にも流れてくるのだから。現にプリンス・アルバートはチフスで、ドンビー氏があればほどその誕生を喜んでいたポールは結核で、死ぬのである。悪気説からすれば、西風が<統計上>よく吹く——このことはヴィクトリア朝人には臭いと煙で実感できた——イギリスのロンドンでウェスト・エンドに金持ちが住み、イースト・エンドに貧しい人達が住むようになったのは当然なのである。

なお上述のディケンズの「社会的懲罰」に表れている考え方は、ディケンズの教育的な意図からでたものではなく、悪気説に付随して一般にうけいれられていたものようである。ミッチェルは前に引用した文に続いて、この説は mixed blessing であり、チャドウィックなどによる公衆衛生キャンペーンの推進力となったと言っているからである。もしヴィクトリア朝人が細菌感染説を信じていたとしたら、上・中流階級の人達は徹底的な隔離政策をとり、文字通り two nations が小さな町からロンドンにいたるまで<棲み分け>をしている状態になっていたであろう。そして勿論金持ちは召使いなし



で暮らしたであろう。そして多くの若い下層階級の娘たちは、彼女たちが生まれ育った環境よりははるかに快適で安全な環境で、そこそこの給金がもらえ、着るものも食べ物も保証されている職に就けなかったことであろう。そして洗濯機、掃除機などの〈家事器機〉はずっと早くに進歩していたであろう。そして――。

### III. A trim (blue) coat

最初に引いたドンビー氏の服装の描写で「青いコート」と同じように問題になるのは、「りっぱな」と訳しておいた trim である。この言葉は、同じく服装についてディケンズが使う tidy, neat のなかでは一番くきちんと度〉の強い言葉のようであり、また、City-merchant としてのドンビー氏の富が強調されているコンテキストのなかで用いられているので、〈りゅうとした〉という表現が、身なり全体ではなく服装の一部にも使える表現であれば、これを訳語に当てたくなるような言葉である。

しかし、訳語はともかく、trim という言葉の陰に隠れていて、「青いコート」と同じく、われわれには意識的に目を凝らして見ない限り見えてこないものを探してみよう。まず手がかりになるのは、次の記述である。

The cult of cleanliness was thus slowly seeping down in society. Those anxious to improve their standing had increasing recourse to soap and water; to the other gaps in society was added the gulf of personal noisomeness. But though it was possible to wash the person, and personal linen, woollen clothes defied cleaning except by brushing and spot removal. Moreover ironing was confined to linen, except when a suit of clothes was about to leave the hands of the tailor. (Checkland, p. 318.)

ヴィクトリア朝人は「清潔さ」にとりつかれていた。それは清潔であることがきわめて難しかったからである。チェックランドは「体やシャツ、下着などは洗うことはできても、ウールの服のクリーニングはブラッシングとしみ抜きによるしかなかった」と言っているが、豊かなヴィクトリア朝人が毎日

風呂にはいり、中流階級のヴィクトリア朝人が週一回入浴するようになったのは、1860年代の半ばなのである (Checkland, p. 318.)。つまり、イギリスでは『ドンビー父子商会』が書かれてから15年以上も経ってからようやく中流階級の人間が週一回入浴するようになったのである。『ドンビー父子商会』とほとんど同じ時期 (1848—50) に書かれたサッカレーの『ペンデニス』ではイギリス人が the Great Unwashed (*Pendennis*, Ch. 29, p. 58.) であったのは過去のことのように言われているが、現代の基準からすればこの時代も the Great Unwashed 時代だったのである。当時、清潔は経済力と階級の標識であった。Cleanliness is next to godliness. は単なる道徳的なお題目ではなかったのである。そして勿論 trim なコートも経済力と階級の標識であった。そこで問題になるのはウールのコートを trim に保つためにどんな方法があったかということであるが、チェックランドは、ウールの服のクリーニングはブラッシングとしみ抜きによるしかなかったと言う。コートの素材は大体がウールだったはずであるから、チェックランドによればしみ抜きとブラッシングがコートの唯一の手入れ方法だったのである。それにアイロンかけもスーツが仕立屋から客の手に渡る時にしかされなかったという。だからヴィクトリア時代のズボンには<筋>がなかった。今のジーンズのズボンと同じで丸いままだった。ズボンに<筋>が付けられるようになったのは1890年以降のことであるというから (Gernsheim, p. 36.) ——私の手元にある図版や写真ではそれが現れるのは20世紀初頭であるが——ヴィクトリア朝人はほとんどすべて<丸い>ズボンをはいていたわけである。それではウールの服については他のクリーニング法は無かったのであろうか。

Until the mid-nineteenth century washing with soap and water was the only way of cleaning clothes and, with woollen fabrics in particular, it was more common to dye them a darker colour to conceal the dirt.....In 1866 the firm of Pullars of Perth set up a business with a postal service throughout Britain, for dry cleaning using benzene or petroleum, both highly inflammable but not requiring the garments to be dismembered. (McNeil, p. 854.)

ウールの生地 of 服に関しては、ドライ・クリーニングが、大きさに言えば

人類の歴史に登場するまでは、ブラッシングとしみ抜き以外にも、前よりも濃い色に染めるというやり方があったということが前段の記述から分かる。そして記憶をたどってみれば、これは実はわれわれ日本人もやっていたやり方なのである。後段の「しかし衣類をばらす必要はなかった」というくだりは、引用しなかった部分に、ドライ・クリーニングは1850年頃パリではじまったが、それは服をばらしてからクリーニングし、その後でまた縫い合わすというやり方のものであったという記述を受けてのものである。これは日本の〈洗い張り〉の〈技法〉に似ているが、イギリスではこの方法は主としてリネン類に使われていたに違いない。また特に女性の服では『クリスマス・Carol』のクラチット夫人がやっているように裏返すやり方もあった(*Christmas Books*, p. 44.)。ちなみにブラーズと前後して William Whiteley もロンドンでドライ・クリーニングのサービスをはじめている (de Marley, p. 115.)。だが、いずれにせよ『ドンビー父子商会』が書かれた時点ではドライ・クリーニングはなかった。しみ抜きとブラッシングと染め直し以外にクリーニングの方法はなかった。それでも〈紳士〉には respectable な服装をしている——つまり、コートでいうなら trim なコートを着ている——必要があった。では〈紳士〉はこの問題をどう解決したのであろうか。まず〈紳士〉のはしくれ〉の例から見てみよう。

We thought we almost saw the dingy little back office into which he walks every morning, hanging his hat on the same peg, and placing his legs beneath the same desk: first, taking off that black coat which lasts the year through, and putting on the one which did duty last year, and which he keeps in his desk to save the other. (*Sketches by Boz*, p. 216.)

彼が毎朝入っていき、同じ帽子かけに帽子をかけ、同じ机にむかう、汚い小さな奥まった事務室が、それに、彼が机にむかう前に、まず、今着ているコートをもたそうとして、今年丸一年着とおすことになるあの黒いコートを脱ぎ、机にしまっている去年一年着とおしたコートを着る様子が、目に浮かぶようである。

これで分かるように、しがない事務員は年一着コートを買ひ、事務室では

前の年のコートを着ている。今年のコートを trim とまではいかなくても何とか neat に保っておきたいからである。しかし勿論＜紳士のはしくれ＞が身につけるものはコートだけではない。したがって、全体としての彼の服装はおよそ次のようなものになるはずである。

.....R. Wilfer was a poor clerk. So poor a clerk, through having a limited salary and an unlimited family, that he had never yet attained the modest object of his ambition: which was, to wear a complete new suit of clothes, hats and boots included, at one time. His black hat was brown before he could afford a coat, his pantaloons were white at the seams and knees before he could buy a pair of boots, his boots had worn out before he could treat himself to new pantaloons, and by the time he worked round to the hat again, that shining modern article roofed-in an ancient ruin of various periods. (*Our Mutual Friend*, Ch. 4, p. 32.)

一略— R. ウィルファーは貧しい事務員だった。給料は少ないのに家族は多いというわけでひどく貧しかったから、彼の慎ましい野心、すなわち、帽子も靴も含めて新調のスーツを一遍に一着に及びたいという願いはこれまで叶えられたことがなかった。黒い帽子はコートが買えるようにならないうちに茶色くなり、パンタルーンズは靴が買えずにいるうちに縫い目や膝のところが白くなり、靴は奮発してパンタルーンズを買う気になった頃にはくたびれはてしてしまっていて、やっとのことでまた帽子を買うところまでこぎ着けたと思ったら、折角のびかびかで最新流行の帽子も、古び具合こそ違うが一樣に古いさまざまなもののうえに鎮座ましましていうことになってしまうのだった。

「貧しい事務員」は全体として trim な服装はできないのである。では、＜れっきとした紳士＞はどうしたか。毎年すべてを新調したのである。

The man about town needed four morning coats, a frock coat for formal occasions, a dress tail coat for evening, and an overcoat. These seven coats, renewed every year, cost him about £18. Six

pairs of morning and one pair of black evening trousers cost £9; four morning and one evening waistcoat £4. Gloves, linen, hats, scarves and neckties amounted to about £10, and boots at least £5 more. (Gernsheim, p. 36.)

ガーンズハイムはくれっきとした紳士が毎年新調する服から靴にいたるまでのこのリストは1855頃のものであると推測している。morning coatは1850年代の前半に登場したという (Gernsheim, p. 36.) から、上の〈紳士の標準装備〉のリストのうち、morning coat を frock coat に読み換えれば、ドンビー氏が毎年新調したはずの服その他のリストと合致するはずである。もっとも、City-merchant のドンビー氏のリストはもっと豪華なものだったとも考えられるが。ちなみに上のリストの金額の総計は46ポンドになるが、この額は当時のうだつのあがらない事務員の年収の五割から三割位になるであろう。これでは彼らにコートが買えるのは年一枚がやっとのはずである。彼らには trim なコートを着る機会はいずれにせよ年に一度しかないのである。この様な状況だったから、ドンビー氏の trim なコートは、ディケンズ一流の〈省略法〉にもかかわらず、「重い金の鎖」とあわせて、十分に彼の経済力と階級を指し示すものとなりえたのである。

#### 注

- (1) 『ボズのスケッチ集』には「インクと埃に汚れた」白いズボンをはいている新米の事務員が描かれているし、『ドンビー父子商会』のトゥーツもフロレンスに会いにゆくときに白い pantaloons をはいている。
- (2) この数字を含むエヴァンズの原文は By 1854 182 local boards of health were in operation but only 13 had completed work on sewerage and water schemes. である。そしてこの文の前には In most cases, however, there was little immediate rush to take advantage of the new public health provisions. と述べられている。つまりエヴァンズは〈お上〉の働きかけにもかかわらず生活環境の改善は遅々として進まなかったと見ているのであるが、私は経済的個人主義の跋扈にもかかわらずこれほど進んだと考えている。

#### Dickens's works cited

- Christmas Books*, Oxford Univ. Press, 1987.  
*Dombey and Son*, Oxford Univ. Press, 1981.  
*Hard Times*, Everyman's Library, 1974.

*Our Mutual Friend*, Oxford Univ. Press, 1981.

*Sketches by Boz*, Oxford Univ. Press, 1981.

#### Other writers and works cited

Best, Geoffrey, *Mid-Victorian Britain, 1851-75*, Fontana Press, 1990.

Briggs, Asa, *Victorian Cities*, Penguin Books, 1990.

Checkland, S. G., *The Rise of Industrial Society in England, 1815-1885*, Longman, 1989.

de Marley, Diana, *Working Dress: A History of Occupational Clothing*, Batsford, 1986.

Emsley, Clive, *Crime and Society in England, 1750-1900*, Longman, 1987.

Evans, Eric, J., *The Forging of the Modern State: Early Industrial Britain, 1783-1870*, Longman, 1991.

Gernsheim, Alison, *Victorian and Edwardian Fashion: A Photographic Survey*, Dover Publications, 1981.

Harrison, J. F. C., *Early Victorian Britain, 1832-51*, Fontana Press, 1989.

Hopkins, Eric, *A Social History of the English Working Classes, 1815-1945*, Hodder & Stoughton, 1991.

Köhler, Carl, *A History of Costume*, Dover Publications, 1963.

Mayhew, Henry, *London Labour and the London Poor*, Dover Publications, 1968.

McNeil, Ian, ed. by, *An Encyclopaedia of the History of Technology*, Routledge, 1990.

Mitchell, Sally, *Victorian Britain: An Encyclopedia*, Garland Publishing, 1988.

Nunn, Joan, *Fashion in Costume, 1200-1980*, Herbert Press, 1990.

Quennell, Marjorie & C. H. B., *A History of Everyday Things in England* B. T. Batsford, 1952.

Read, Donald, *England 1868-1914*, Longman, 1988.

Roebuck, Janet, *The Making of Modern English Society from 1850*, Routledge, 1982.

Seaman, L. C. B., *Victorian England: Aspects of English and Imperial History, 1837-1901*, Routledge, 1973.

Thackeray, W. M., *Pendennis*, Penguin Books, 1990.

Young, G. M., *Portrait of an Age: Victorian England*, Oxford, Univ. Press, 1983.

Weightman, Gavin, and Steve Humphries, *The Making of Modern London, 1815-1914*, Sidgwick & Jackson, 1984.

Wright, Lawrence, *Clean and Decent: The Fascinating History of the Bathroom & the Water Closet*, Routledge, 1960.